

# 平成26年度第2回秋田県社会教育委員の会議要旨

I 日 時 平成26年7月7日(月) 14時00分～16時00分

II 場 所 県庁第二庁舎4階 高機能会議室

III 出席者 委 員：伊藤(州)委員 伊藤(晴)委員(議長) 大山委員 佐々木(公)委員  
佐々木(信)委員(副議長) 佐藤(明)委員 佐藤(信)委員 新屋敷委員  
谷藤委員 新田委員

事務局：小玉副主幹(兼)社会教育班長 村井社会教育主事 片岡社会教育主事  
柏木社会教育主事 森川社会教育主事 糸田社会教育主事

## IV 会議概要

### 1 開 会

### 2 あいさつ(小玉社会教育班長)

### 3 協議

#### (1) 提言文素案について

##### ① 視点1「情報化への対応について」

- ・昨年度のサポーター養成講座の際、4回の講座全部に参加するのは難しいと尻込みした人もいた。PRにより少しは広がったが、その後のフォローが必要だ。
- ・意外に学校の先生が知らない。ぜひ、大人より子どもたちが先に進んでいる現状を先生方にも知ってほしい。
- ・出前講座は分かりやすいが、子どもにその内容を伝える方法が分からない保護者もいる。子どもに話をするきっかけになるテキストなどが必要だ。

#### (事務局)

- ・県教育委員会では、庁内各課が連携して、子どもと話すきっかけとなる4つのポイントを示したリーフレットを作って配布している。それを家庭の中でどう話題にしていくかということで、家庭の教育力が必要になってくる。また、小さいうちから段階的に教えていく必要があるために、小学校だけでなく、幼稚園等でも伝えていけるように工夫したい。早めに啓発していくことや、市町村の家庭教育講座に加えられると、さらに身近なものになる。
- ・インターネットに関する講座は、保護者の関心が高いので、定期的を開催して浸透させたい。職員の関心が薄いので、職員向けに危機感を高める研修も必要になってくる。

#### (事務局)

- ・幼保推進課であれば園長向けに、保健体育課であれば養護教諭向けに話す機会が増えているので、これからも連携してやっていきたい。
- ・大人が講座を受けて学び、子どもに理解させているが、大人と子どもが一緒に講座を受けて、

現状をきっちりと理解していく機会を設ける必要があるのではないか。学校で詳しい人がいないのであれば、職員にきちっと研修を受けさせた上で対応していくことが大切だ。

#### (事務局)

- ・子どもと保護者が一緒に受ける講座が増えている。本来、子どもだけに伝えるのであれば、学校教育の取組である。PTA親子研修会等で親子が一緒に聞くことで、家庭での共通の話題づくりになることを期待している。県の職員が全てをフォローするのは限界があるので、市町村の講座に取り入れてもらいたい。しつくと同じように、家庭教育の土台としてきちんと位置付けていくことが大事である。
- ・研修をどこが担っていくか？県がリーダーシップを取って市町村と連携して、親と子どもの一緒に研修を定期的・継続的にやっていくことが大事である。そのための予算を確保した上で、家庭の諸問題の糸口として、家庭教育を支えていく手がかかりとして、組織的・網羅的にやっていくことが大事であり、教職員の研修も含めてやってほしい。
- ・「永続的」の文言は違和感があり、「継続的」に修正した方がよい。
- ・ほとんどの学校で、就学時健診や入学説明会で講座が行われるようになった。情報教育も同じように、PTAで年1回は親子一緒に学習するように、強く推進したい。

#### ② 視点2「国際化への対応について」

- ・以前は県で日本語学習支援をやっていたが、その後市町村が引き継いで取り組んでいる。県からの支援があると市町村も動きやすい。県国際交流協会や市町村の国際関係団体との連携なども考えられる。
- ・ALTが、保育園や小学校、児童館にも訪問しているので、子どもは小さいときから英語に触れることができる。
- ・意欲のある人に機会を保障するだけでなく、困っている家庭をどう支援していくかという視点が必要であり、そこに組織的に取り組んでほしい。
- ・ALTと週1～2回程度話す機会があれば、力がついていく。幼稚園では英語塾の先生が来てくれており、子どもにとっても貴重な経験になっていた。
- ・県内で生活している外国人に協力してもらい、遊びを通して交流を図りたい。
- ・日本に来ている外国人への支援と、秋田の子どもたちが外国人に対応できるための家庭教育支援の2つの視点が必要である。ALTやJICAの外国人との国際交流の機会はたくさんあり、恵まれている。しかし、教育委員会ではなく観光部署の所管のため、とても使いにくい。組織の垣根を越えて使えるようになってほしい。
- ・学校の図書館はもちろん、市町村の図書館など、人がたくさん集まるところに、外国の図書もそろえてあればよい。自分の国だけでなく、他の国の文化に触れる方法の一つである。
- ・外国語の絵本も含め、幼少期から外国語の本に触れる機会を与えたい。予算は厳しいとは思いますが、いろいろな本を入れてほしい。
- ・県主催のスキルアップ研修で国際化の視点を考えてもいいのではないか。

- ・少しずつでも外国語に触れる機会を作っていくことで、根っこからの国際化につなげたい。
- ・図書館の本を使うのは保護者にとって大切である。英語を子どもに教えることができる親は少ないが、外国の文化については教えられる。国際教養大学の本を県立図書館で展示するイベントを開催するなどの工夫をしていけば、親が活用しやすくなる。
- ・読み聞かせサポーターを養成するような視点でインターナショナルの感覚を身につけるための講座を企画してほしい。地球にはいろいろな人がいて、いろいろな文化や習慣があるということを知るサポーターを養成してもいいのではないか。県が講座を実施して、その後市町村が引き継いでいけるようにした。旅費さえ出れば、自分の国を紹介したい留学生はたくさんいる。
- ・生涯学習センターの中に、国際化を広報するコーナーを設けられないだろうか。市町村では、国際化を進める上で、公民館の役割は大切だ。県の研修の中で国際感覚をもつ人材を育て、地域に根ざすような取組を実施してほしい。また、生涯学習センターに国際担当職員を配置して、NPO団体と連携を図ったり、国際化に関する相談に応じたりする窓口を設置してほしい。
- ・テレビでも世界を感じることができるが、目で見て、耳で聞いて、口で話すことが大切である。共働きの家でも家族でふれあう機会を設けていくことが大切である。
- ・国際化といえばユネスコを活用するのも一つの手段である。

### ③ 視点3「家庭生活への対応について」

- ・家庭生活への支援はいつの時代も同じ話題があり、まさに永続的な課題である。
- ・大学生や高校生をボランティアとして活用するシステムがもっと整備されればいいと感じる。少年自然の家に限らず、公民館などでも活用できればいいと思う。
- ・親子劇場などのイベントで、託児サービスの手伝いとして高校生が行ったケースがあるが、安全面や交通費などでは難しい面もある。高校生や大学生に交通手段が確保されていれば活動に出かけやすいし、次代の担い手が育つことになる。
- ・助成金や補助金を活用したイベントが多く実施されている。食費はだめだが、ボランティアの謝礼は出すことができる。それをうまく利用していけばいいと思う。
- ・生涯学習課のイベントには、ボランティアの旅費や託児などが予算化されていることが、これから当たり前になればいいと思う。
- ・公民館で子育て支援の講座をやっても人が集まらない。周知に工夫が必要。共稼ぎが多いので、おじいさんおばあさんを巻き込んだ方がいいかもしれない。
- ・最近では、座学では興味ある人しか参加しない。お祭りのようなイメージも持たせ、今まで来ない人が来るような仕掛けが必要である。元気が出て、子育てのパワーが得られるものがよい。さらに深めたい人向けに、別に二本立てにすることもよい。
- ・実際に本当に必要な方に情報が届いているか、もう一回考える必要がある。悲劇にならない

ようにするための事前の手立てが必要で、そのためにはいろいろな部署との連携が必要である。県としては、もっと広い視点に立った施策を大切にしてほしい。

- ・家にこもりがちなお母さんを外に出そうということで、手芸や料理を取り入れた講座を実施したことがあった。外に出られたことによって、明るくなり、その後ボランティアで活躍している。プライバシーに配慮しながら、そのような市町村の取組情報を県から発信してほしい。
- ・シングルマザーの方を対象に講座を実施したことがあった。人数は少なく、費用対効果としては悪いが、必要なことだから現在も続けている。行政にも、本当に必要なことは切らずに続ける強さを求めたい。
- ・小さい輪が大きい輪になっていくように、譲れないところは譲らずにがんばってほしい。
- ・家庭教育支援チームは、今こそ必要ではないかと思う。困っている人にとってはそれが何よりの支援ではないか。県で旗振りをして、市町村に再度呼びかけてはどうか。
- ・子育てに関わる地域のイベントや、小さい子どもがいる親へのサポートの実践例を県内に知らせてほしい。
- ・個々に家庭を訪問している民生委員の中に元教育関係者が多い。特に小学校の先生は、子どもを通して家庭を見てきた経験があり、退職後地域に関われるように、現役の時から意識付けをしてほしい。
- ・早寝早起きの生活習慣の大切さを強く感じる。
- ・最近は防災関係の体験が増えているが、キャンプで規制的な生活習慣を身につけることも大切だ。
- ・新しいことをやらなくても、今あるものを強化していくということも大事である。
- ・少年自然の家は、ほとんどの学校が5年生で利用している。小学校2～3年生くらいでキャンプを経験しておくで、5年生になった時に役立つし、親子での貴重な体験になるので、長期休業中に親子でキャンプをするということをもっとPRしてほしい。

## (2) 調査研究について

### 4 その他

### 5 閉 会 (小玉社会教育班長あいさつ)